

第 15 回大間原発反対集会、前日からのロックフェスティバルとで計 360 人が結集！

『小さなスマイルを大きな力に！』を合言葉に大間町で J パワー（電源開発）が建設を進めている大間原発に反対し、反核や非核を訴える「大 MAGROCK（マグロック）フェスティバル」と「大間原発反対現地集会」が 7 月 22、23 日に原発敷地に隣接する「大間原発に反対する地主の会」所有地で開かれました。国が大間原発の建設を許可した 2008 年から始まったこのイベントは今回で 15 回目となりました。

23 日の現地集会には、青森県内のみならず原子力施設を抱える宮城や新潟の各県、津軽海峡を挟んだ対岸の北海道函館市などから計 200 人が集まりました。集会では「大間原発に反対する地主の会」の今村修代表が「30 年を過ぎても完成しない六ヶ所村の核燃料サイクル施設と、そこから出たプルトニウムを使って動かす大間原発は裏表の関係だ」などと指摘し、むつ市の中間貯蔵施設など

も含めた原子力関連施設の「すべてを止めよう」と呼びかけました。また、下北現地からは先の知事選挙で『脱原発』を訴えて健闘した横垣成年元むつ市議が連帯の挨拶をしました。

集会後、参加者たちは、「原発いらない！」「核のごみを持ち込むな！」などとシュプレヒコールをしながら町内をデモ行進しました。

22、23 両日にわたり開催されたマグロックには県内外から 10 組を超える団体、個人によるパフォーマンスが繰り広げられました。また、22 日夜には大間町総合開発センターで『大間でトークナイト 2023』と題したフリーディスカッションも開催され、核に頼らない地域づくりについて話し合いました。

この 2 日間で集会、ロックフェスティバル、トークナイト延べ 360 人が結集しました。



「大間原発に反対する地主の会」の今村修代表



集会には炎天下でしたが 200 名を超える参加者が…



大間原発建設中止を
200 人が現地集会

電源開発（J パワー）大間原発の建設に反対する市民団体などが 23 日、大間町の同原発敷地に隣接する反対派共有地で現地集会を開いた。県内のほか、北海道

など全国から集まった約 200 人（主催者発表）は、国と同社に対し原発の建設中止を求めるなどとするアピールを承認した。

集会では各団体の代表者が思いを訴えた。「ストップ大間原発道南の会」の大場一雄代表は「青森県を最終処分場にしないという約束が守られるかは分からない。信頼できない国はいらない」、「大間原発訴訟の会の竹田とし子代表は「プルトニウムを使ってはいけない、大間原発を含む原発はいらない」という声を大きくしていこう」とそれぞれ呼びかけた。

集会後、参加者はポスターやのぼり旗を掲げ、太鼓をたたき「大間原発、絶対反対」などと声を上げながら、町中心部でデモ行進を行った。現地集会は J パワーが建設工事を始めた 2008 年に始まり、15 回目。（川越真也）

むつ市議選 10月1日投票！杉浦弘樹議員も再選へ本格始動

任期満了に伴うむつ市議会議員選挙は9月24日告示、10月1日投開票のスケジュールで行われます。

今回の選挙は先の4月の補欠選挙（無投票）当選者の3名も交えた少数激戦が予想されます。

杉浦議員は立憲民主党公認で2期目の当選をめざし、日々精力的に行動しています。この4年間、地域に密着した課題や市の原子力政策など計15回の一般質問を行いながら市民とのパイプ役としての任務を果たしてきました。

今回の選挙では山本信悦立憲民主党むつ下北支部幹事長を選対本部長に据えて万全の態勢で本格的な活動をスタートしました。

選挙事務所は連合下北地域協議会事務所の真向かいを予定し、今月20日以降は選対本部長の常駐も予定しています。

定数22名中杉浦議員と2名の共産党議員以外がオール与党という議会勢力の中で何としても杉浦議員の再選が健全な市政運営のためにも必須です。みなさんの御支持、ご支援をお願いします。

すぎうらひろきは 3つの政策提言をします。

①子育て、学校教育の支援

○安心して子供を産み、育てることができる環境の実現に向け、支援策等の政策提言をします。

○経済的事情や住む地域に左右されことなく、学業・スポーツを自由に選択することができる環境を整備するため政策提言をします。

②持続可能な地域づくり

○魅力あふれる地域づくりを推進するため、地域資源を活用した観光策や特産品の開発等の政策提言をします。

○持続可能な漁業の構築へ向け、環境対策や漁業者の収入増加、なり手確保等の支援策の政策提言をします。

③地域公共交通の維持、活性化

○地域公共交通は、住民の日常生活や地域経済を支える重要な社会基盤のため、地域の団体や住民とともに維持・活性化に向けた活動を行います。また、地域の実情に即した新たな公共交通の整備や利便性の高い公共交通の整備に向け政策提言をします。



【ごあいさつ】

杉浦弘樹

初当選から4年が経過し、これまでに地域の皆様方の声を議会に届け、政策に反映させる活動を行ってまいりました。一般質問は、毎回議会で行うこと15回、議案質疑や常任委員会、各特別委員会では多くの質疑を行い、地域の問題点を解決するべく議会で発言をしてまいりました。一般質問の内容といたしましては、主にむつ市の基幹産業である漁業に関する質問や、観光政策、地域公共交通政策、鳥獣被害対策等を質問してきました。

また、議会での活動だけではなく、地域住民からの相談や要望等の活動も積極的に行ってまいりました。除雪での道路破損の修繕や放課後児童健全育成事業がない地区の長期休業日の受け入れ体制設置、大雨災害での川の氾濫箇所の早期浚渫工事の要望、市が運営する施設への入所手続きの支援、町内や地域にある集会所の修繕の要望等を行ってまいりました。

思い返せば、この4年間の多くは新型コロナウイルス

感染症の世界的な蔓延により活動が制限され、経済が疲弊した難しい4年間でありました。しかし、その中でも世界や日本、そして地域がこの局面を乗り越え、新たなステージへと移行していく大事な時期にきているものと感じております。

私、杉浦弘樹はこれまでも、そしてこれからも地域の発展のため、皆様方の声を議会に届け、政策に反映させるよう積極的に活動を行ってまいります。また、私の理念でもあります、多様な意見や価値観が尊重される社会、住民一人ひとりが輝く地域づくりへ向け、持続可能な地域社会の形成を目指して、今後も皆様とともに活動を続けてまいります。



《これまでの活動実績の一部》

- ・ 長年放置された除雪での道路破損を修復する工事の要請、その後に修復工事実施。
- ・ 小学生の親からの相談により、放課後児童健全育成事業がない地区の長期休業日の受け入れ体制の整備。
- ・ 令和4年8月脇野沢地区での大雨災害において川の氾濫箇所の早期浚渫工事の要請、その後補正予算が組まれ9月から工事を実施。
- ・ 災害で浸水する国道に対する下北地域県民への改善工事の要望。
- ・ 集会所の屋根のペンキ塗り実施要請や修繕の要望
- ・ 市が運営する施設への入所手続きの支援。
- ・ 川内、脇野沢両消防分署の機能を残す必要性を一般質問で訴える、その後両消防分署の新規建替え計画が決定。

ローカル鉄道路線の維持へ向けて沿線自治体へ要請行動が行われました ～むつ市、横浜町、野辺地町でいずれも市長、町長が対応しました～

「下北半島の大動脈」JR大湊線を守る会（山本司代表）は7月21日にむつ市、25日には横浜町及び野辺地町を訪れ、ローカル線の維持による地域活性化創造のための要請行動を行いました。

この行動は「地域公共交通活性化再生法」が4月に成立したことに伴い、必要に応じて国の主導の下に「再構築協議会」を結成し該当路線の存廃や輸送方法の転換などが論議されることとなります。こうした状況下では赤字体質を前面にだした議論がされることが必至となるため、沿線自治体として地域活性化を重点に据えた対応が重要となるため、今回の行動を行ったものです。

3自治体とも市長、町長が直接応対し、会の要請に真摯に耳を傾けていただき、問題意識を共有しながらで自治体としても可能な限りの知恵を絞りながら取り組んでいくことを表明しました。

要請行動には連合下北退職者協議会のメンバーの他、ローカル線問題を議会活動の最重要課題の一つと位置付けて活動している杉浦弘樹むつ市議会議員も帯同しました。



鉄道再生へ 働きかけを

大湊線を守る会
むつ市長訪ね要請

元JR社員ら有志による「下北半島の大動脈JR大湊線を守る会」の山本司会長らが21日、むつ市役所に山本知也市長を訪ね、大湊線をはじめ地方路線の存廃について採算性の議論に終始せず、鉄道再生に向けあらゆる方面に働きかけるよう要請した。

鉄道再生の重要性を訴える山本司代表（左）

21日、むつ市役所

となる上下分離方式での鉄道存続が、バス転換による廃線の二者択一に迫られるとの危機感を示した。

地方路線が生活を支える足であり、産業や観光の振興に不可欠で、全国的な鉄道ネットワークとしてつながることも重要と主張。特に最近の観光需要の高まりを挙げ、鉄道存続の意義を訴えた。沿線など10市町村が昨年12月に立ち上げた、大湊線の利用促進を図る協議会での議論を、広く市民に周知することも求めた。

山本市長は「まずは地元住民の利用増が重要と考える」などと述べ、大湊線の活性化に取り組む意向を説明。協議会の検討内容も積極的に公開するとした。

山本会長は取材に「コロナ禍の落ち込みから盛り返しているが、数字的にはまだ厳しい。自分たちが大湊線を守り活性化させるよう取り組み、その意識が市民に広がっていけば」と強調。25日には横浜、野辺地両町へ同様の要請を行う方針だ。

（工藤文一）

要請内容（むつ市宛）のポイント

- ① 国鉄改革時のスキームに踏まえ、赤字ローカル線の問題を地方の議題に切り締めること無く、未来の日本全体の鉄道の在り方を国策として議論をするために、むつ市としてあらゆる方面へ働き掛けることを要請します。
- ② 「廃線」では、人流、物流が阻害され地域の活性化は望めません。「上下分離方式」では結局、自治体の経済的な負担が増し、将来的に自治体運営に支障を来たします。鉄道の特性である定時性・速達性の向上とともに、安全性向上と大規模災害時のライフライン確保の為、大規模工事を含めた現存の鉄道の再整備を国の施策として検討していくことが必要です。鉄道再生の為にあらゆる方面に働き掛けることを要請します。
- ③ JR 大湊線沿線及び周辺地域の活性化を目的に設立された「JR 大湊線活性化協議会」の中で、どのような議論が行われているのか私たちも関心を持っています。地域住民に議論の内容を周知するよう要請します。
- ④ むつ市総合経営計画後期基本計画の『広域交通ネットワークの形成』の項において、『現状と課題』として「JR 大湊線については、風規制の緩和及び安全対策工事がなされ、強風による運休は大幅に減少しましたが、一層の利便性向上及び利用者数の増加が課題となっています。」と記載されています。こうした課題に向けて、利用しやすい JR 大湊線とするため、列車ダイヤや接続などについても「JR 大湊線活性化協議会」の中で議論していただくよう要請します。

第30回 浮島丸出港追悼集会

・とき 2023年8月22日（火）午後1時30分～

・ところ むつ市中央公民館駐車場（雨天時は公民館内）

※ 集会後、浮島丸事件をめぐる学習会（講師：建部玲子元県議）を予定しています
～再び悲劇のないよう、犠牲者を悼み、みなさんのご参加をお待ちしています～



むつ中間貯蔵施設、稼働時期が見越せない中、

むつ市の使用済み核燃料中間貯蔵施設は、原子力規制委員会による一連の審査がほぼ終了したと伝えられています。また、安全対策工事も本年度中に完了する予定とされています。リサイクル燃料貯蔵（RFS）は、これに合わせて事業開始時期を示すとしていましたが、最初の搬出元となる東京電力柏崎刈羽原発は核燃料の移動を禁じる是正措置命令が続いていることに加え、施設稼働の前提となるはずの再処理工場はさらに、その完成稼働は全く先が見越せない状態が続いています。

こうした根本的な問題もあります。電気事業連合会の池辺会長も2020年7月、『再処理工場と中間貯蔵施設の操業はセット』という趣旨の発言をしており、工場の完工前に中間貯蔵事業が始まれば、本来の目的との整合性が問われることは必至です。県内の多くの関係者が「現段階では正式な事業開始時期は決めようがないだろう」との見方を示しています。もちろん、稼働前には当時の協定書に基づく地元との安全協定もまだスケジュール化

がされていません。むつ市が制定を求める使用済み核燃料税問題も宙に浮いたままです。

また、事業開始に向けては、実際に燃料を入れた金属容器（キャスク）を受け入れて行う最終検査を行う必要があります。しかし、前述のとおり、柏崎刈羽原発から試験用のキャスク自体の搬入が不可能なため、この最終検査もメドが立っていません。

こうした中、８月２日に山口県上関町の中国電力所有の土地に隣接する関西電力が共同であらたな使用済み核燃料中間貯蔵施設を計画する案が急浮上してきました。

同町にはかなり以前より上関原発構想があったものの住民の反対など計画が進んでいないこともあり、原子力マナーで地域の活性化を目論む自治体があることも事実です。また福井県からの使用済み核燃料の県外搬出を地元原発の再稼働の前提条件とされていることから2電力会社や原発推進派の思惑が今回の構想が浮上したものと思われま

8/3 デーリー東北

中間貯蔵施設 中国電表明

関電と共同、山口・上関町に

中国電力の入選が懸念され執行役員は三日、山口県上関町で記者会見し、上関町の同社所有地で廃棄の使途済み核燃料の中間貯蔵施設建設を検討していることを表明した。一単位での建設や運営が難しい」として、同様に施設が必要な関西電力との共同開発を前提にボーリング調査などを進めるとした。【5頁に関連記事】

調査提案、全国2例目か

東京電力と日本原子力発電にあり、上関町にてできれば電が出資する「リサイクル全国」の創出となる可能性がある。



中国電力上関原発の建設予定地（画面中央左）。周辺に広がる同社所有地に中間貯蔵施設の建設が検討されている＝2日、山口県上関町（共同通信社ヘリから）

中間貯蔵施設の役割



大瀬川氏が午前、町役場を訪れ、西吾夫町長に説明。西町長は近く臨時議會を開き、調査を受け入れるかどうか諮る方針。

東電福島第一原発事故などを受け、中国電の上関原発計画はほとんど進んでおらず、町側が代替の地域振興策を中国電側に要請していた。西町長は報道各社の取材に応じ「このまま何も

や大数投票を運用。福井県に対して中間貯蔵施設の興外候補地を示すし、納束していた、むつ市の施設利用にいったん意欲を示したが、当時の宮下宗一、市市長が反対。今年6月、使用済み核燃料の一部をフランスに輸出して再処理する方針を表明していた。

4千円位の交付金が町に入るといふ。建設には、中国電局横原発（松江市）や関電の原発から出る使用済み核燃料を受け入れる想定。大瀬田氏は会見で「原子力事業者の過誤による貯蔵能力の拡大につながる」と説明した。

2日前朝8時50分ごろ、大團圓氏が町役場に到着すると、数十人の反対派住民が立ちふさがつてもみ合いに。住民は「核燃料を持ち込むな」と怒声を浴びせた。

同社の所在地内で、発電所の建設予定地の外、調査期間中は、国から年間1億5000万円を、町が誘致を表明。2009年に準備工事が始まったが、11年の福島第1原発事故を受け中断している。

② 中間貯蔵施設 原発で使い終わった燃料を、使用済み核燃料再処理工場に運り出すまで一時保管する施設。原発での使用済み核燃料プールの燃料を保管しているが、日本原燃の再処理工場（六ヶ所村）の稼働が大幅に遅れ、各地の原発ではプールの容量が逼迫（ひっ迫）している。燃料になると運転できなくなるため、中間貯蔵施設建設は原子力政策の重要課題となっている。施設では燃料を金属容器に入れて空気の対流で自然冷却するのが一般的で、プールより安全性が高いとされる。燃料を再処理して発生する高レベル放射性廃棄物を地下深くに埋めるのが最終処分場。

山口県上関町にあらたな中間貯蔵施設計画が…

も影響に共用案にむつ

上関町構想、代替案の可能性

関係者「急ぐ必要なくなる」



大手電力各社での共同利用案がくすぶっている
むつ市の中間貯蔵施設（2022年10月）

中国電力が山口県上関町で使用する核燃料中間貯蔵施設の建設を検討していることを巡り、関西電力も調査に加わることが2日、明らかになった。関電はむつ市の中間貯蔵施設を電力各社で共同利用する案に積極的に参画したい意向を示していたが、地元の反発で難航していた経緯がある。上関町で浮上した構想はそれに代わる案となる可能性もあり、むつ市での共用案の

行方にも影響を与えそう

だ。

本来は東京電力、日本原子力発電の使用済み核燃料のみを保管するむつ中間貯蔵での共用案は、2020年12月に浮上。大手電力でつくる電気事業連合会が「検討に着手したい」との方針を表明した。

しかし、当時の宮下宗一郎むつ市長は「共用化ありきの議論はできない」と反発。電事連は地元の理解を

得たいとしていたが、その後も市や青森県への説明はなく、進展していなかった。

関電は自社の全原発が立地する福井県に対し、23年末までに中間貯蔵の県外候補地を示すと約束しており、期限が迫る中で浮上した上関町での共同調査には、搬出先の確保を急ぎたい関電の思惑がにじむ。

むつ共用案を巡り、関電の広報担当者は同日の取材に「今後の取り組みの支障になる恐れがあるので差し控えたい」と述べ、スタンスを明言しなかった。

一方、電事連は「今回の案件を受けて方針が変わることはない」と、引き続き共用案を模索したい考えを示す。ただ、青森県やむつ

市など地元に対して説明する具体的な見直しはないという。

むつ共用案は事実上の関電救済策とみられてきたが、電事連はあくまで業界全体の使用済み核燃料対策として意義を強調してきた。そうした事情を踏まえ、青森県内のある自治体関係者は「別（上関町）の計画が進んだとしても、すぐにむつ共用案をやめずとは言えないのでは」と推測。

ただ「少なくとも、むつ共用案を急ぐ必要はなくなる」との見方を示した。

（右端修平）

8/3 デーリー東北

自治体財源確保へ原子力施設が脚光を浴びる現実

今回の上関町は40年以上前から中国電力による原発計画がありましたが予定地付近の祝島住民の猛烈な反対運動、そして3・11大事故の影響で計画は進んでいない現状があります。地元経済界が期待した「原発マネー」の恩恵はなく、あらたな地域振興策として中間貯蔵施設構想が出されました。原発を再稼働させていない中国電力は、使用済核燃料の保管場所に困っているわけでもなく、この計画は喫緊の課題ではなく、こうした事業投資の経営体力もないとされています。

一方、関西電力にとって使用済核燃料の保管先の確保は最優先の課題であり、美浜や高浜原発を稼働させる条件として、今年末までに福井県外に保管場所の候補地を確定させることを福井県に約束しています。

こうした思惑が絡み合って今回の共同計画が持ち上がりました。

過疎の町対立は必至

中間貯蔵

「交付金に期待」

「いつ撤去かわからない」

原発の新設計画が進められてきた山口県上関町で、原発の使用済み核燃料を一時保管する「中間貯蔵施設」を建設できるかどうか、中国電力が調

査を実施したいと町に提案する見通しとなった。

町は施設の受け入れについて検討する方針だが、すでに反対の声もでおり、是非をめぐる激し

い対立が予想される。

▼1面参照

中国電は2日に上関町を訪れ、中間貯蔵施設をめぐる方針について説明する予定。西哲夫町長は

1日、取材に対し「（中国電から）提示を受けた後、議長と相談してどういう場で協議するかを決め、議員のみなさんに判断を委ねる」と話した。町内では1982年に原発の新設計画が浮上。2009年に上関原発の準備工事が始まったものの、11年の東京電力福島第一原発の事故後、工事は中断されていた。町に

よると、これまで計約76億円の原発関連の交付金が入り、町政運営などに充ててきた。ただし工事の中断で増額は見込めなくなり、今年度は約8千万円にとどまっていた。

一方で、いまの町の人口は2310人と、原発計画浮上時の3分の1ほどにまで減少。原発推進派の町議の一人は「このままでは町は存続できない」と訴える。

そこで町議らは21年、東電などが出資する中間貯蔵施設がある青森県むつ市を視察。中間貯蔵施設ができれば国からの交付金や税収増が期待できるとして、この町議は「施設を拒否する理由はない」と主張する。しかし町内では、原発関連の安全性や自然への影響について根強い不安

の声があがっていた。

「上関原発を建てさせない祝島島民の会」の清水敏保代表は「中間貯蔵と

いっても、核燃料はいつ撤去されるかわからない。希少な自然が残る瀬戸内海につくらせるわけにはいかない」と話して

いる。（小川裕介、鈴木史

風間浦村役場庁舎の移転新築がクローズアップされています

築後 87 年となる風間浦役場庁舎などの新築移転構想が 2026 年度供用へ向けて具体的に動き出しました。隣接する大間町役場庁舎、むつ市役所庁舎といずれも電力会社の財政負担を引き出しながら豪華な建物となっている中、同村の庁舎の建て替え、津波対策としての移転の必要性は誰もが異存のない政策と思われる。

しかし、その費用が 33 億円という破格の金額になることなどから各方面から様々な意見が出されています。先日、朝日新聞がこの件を大きく取り上げています。ちなみに大間町役場庁舎に新築費用は 19 億円（うち J パワー 7 億円負担）、むつ市役所庁舎は 28 億円（うち東電 15 億円寄付：推定）となっています。

「33億円新庁舎」揺れる1700人の村

風間浦村 役場や消防など5棟新築・移転計画

8/5 朝日新聞



移転・建て替えが議論されている風間浦村役場（左）と消防庁舎



風間浦村役場（中央）の隣には川が流れており、上流での大雨時には土石流などに遭う恐れもある川が流れている風間浦村

築90年近い木造 防災不安

人口1700人の村に、33億円の庁舎は必要なのか。本州最北端にある村が、役場の建て替えをめぐる揺れている。村の試算で、人口は2045年に半分以上の774人になると見込まれるなか、なぜ今、建て替えることになったのか。

下北半島にある風間浦村。役場は1936年の建設で築90年近い木造2階建てだ。だが、「国面が一部見当たらず、建設当初から2階建てだったかどうかはわからない」（職務課）と、言うほど増改築が繰り返されてきた。

村の高齢化率は約46%に上るが、エレベーターはなく、狭くて急な階段に、ドアはゆがんで開きにくく……。そんな状況が、手狭で事務スペースが十

分に確保できないことから、一部の課は少し離れた総合福祉センターに入っている。村民からも「ワンストップサービスの時代に手狭さが1回で終わらない」と不満だ。

防災面でも不安がある。役場は津波海岸に面し、海からの距離は200メートル。内閣府が2020年に公表した想定で、日本海側の沿いの巨大地震が起きれば、津波で2階の天井まで水没するとされている。閉

塞性も不十分で、地震で倒壊する恐れもある。

役場に隣接し、一緒に建て替えが検討されている消防庁舎は1973年の建設で、こちらも木造2階建て。役場よりも老朽化は進んでおり、災害時に機能を失

事業費 村の財政上回る 歳入見込み甘さも指摘

村は昨年3月になって、現在地から北西に約1.5離れた、標高約30メートルの高台に移転する方針を決定。役場や消防庁舎、防災倉庫など計5棟を新築・移転する総事業費として、28億7千万円を見込んだ。

今年3月末にできあがった基本設計では、敷地は約2万7千平方メートル。1階ホール、吹き抜けには、かつて林業が盛んだった村を象徴するものとして、薪ストーブを設置するといった趣意も示され、総事業費は33億円に膨れあがった。

村側は6月下旬にあった村議会特別委員会で、事業費が大幅に増えた理由として、昨今の資材価格の高騰などを挙げた。

五十洲参事は「33億円はあくまで、そのままだ積み上げた数字。実施設計に合わせ削り込む」とする。

さらに、33億円のうち17億円は、国が7割を負担する緊急防災・減災事業費を充てる。そのため村は、減災債の運用期間である25年度内の工事完了をめざし、作業を進める意向を示す。

金森一規村議は、老朽化や防災面から移転・新築は必要との立場だが、「人口が1700人を下回った村に、果たして33億円の庁舎があるのか。身の丈という

特別委では、費用開示のほか、移転予定地内に風間村役所有の土地（計約3千平方メートル）が含まれていることが取り上げられた。

倫理的な問題がないのかや、民法に触れないのかとの指摘に対し、富岡村長は「弁護士とも相談し、法的な問題はないことを確認している」とした。

そのうえで、「できれば自分の土地を離れたかったが、そうすればさらに費用がかかり、村の不利になる」と強調した。

村は、基本設計の内容を住民に知らせる説明会を8月3日から始めた。8日には村内を一巡するが、村は「これから先の大規模な仕様変更などは考えていない」としている。（熊谷照彦）

失う可能性は役場より大きいという。

建て替えはこれまで何度も議論されてきた。

村の五十洲参事・総務課長は「歴代村長が検討してきたが、観光温泉施設の建設や多目的グラウンド整備など、村民サービスを優先してきた結果、役場は後回しになった」と話す。

「平成の大合併」に離れ、風間浦村は2003年、むつ市など8市町村でつくる「むつ下北地域合併協議

会」に参加。その後、離脱して8年に再び、むつ市を相手に合併協議を進めたが、住民投票の結果、「合併による規模のメリットに頼らない道」を選んだ。

村の名前は残ったが、老朽化した役場もそのまま残ることになった。

17年には、役場と消防庁舎の新築・移転を重点課題に掲げていた前村長が急死。後を継いだ富岡宏村長は、観光誘致のため温泉施設の整備を優先した。

言葉がある」と話す。

村の財政は、決算ベースで30億円前後で、新庁舎の事業費はそれを上回る。さらに、維持・管理費は年2500万円を見込んでおり、現状より400万円増える試算だ。

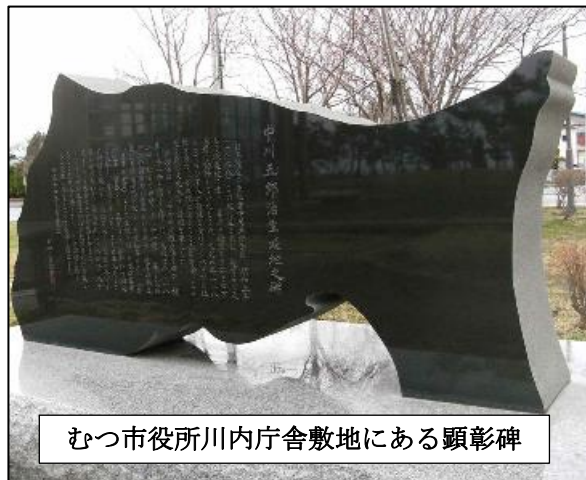
そのうえ、村の歳入見込みには、現在建設中の大間原発電やむつ市の使用済み核燃料の中間貯蔵施設が、稼働すれば入る交付金も盛り込んでいます。

元村長の横沢力さんも「いつできるかわからない調達の交付金まで歳入に計上している。拙速だし、想定が甘すぎないか」と疑問を呈する。

中川（小針屋）五郎治という人物をご存じでしょうか

かつて死の伝染病として恐れられた天然痘。西洋でジェンナーという人が牛の天然痘が軽度であることに目をつけ、いわゆるワクチンを開発して、その予防方法を発明します。

ヨーロッパやロシアではこれが広まり天然痘の猛威に怯えることはなくなっていくのですが、江戸時代の日本にはこの方法が伝わらず、神仏に頼り祈ることしか出来ませんでした。この天然痘の予防接種を日本で初めて導入したのが**むつ市川内町出身の中川五郎治**なのです。



むつ市役所川内庁舎敷地にある顕彰碑

下北の星・中川（小針屋）五郎治

樺太やロシア・満州など、酷寒の異国をさまよい、奇跡の生還をした川内の小針屋五郎治は、江戸末期に実在した人物である。後世の医学界やスキー界の先駆とも言うべき事実は小説よりも奇なりという雄大なロマンの主である。

五郎治は明和5年（1768）陸奥湾の川内町に生まれた。親は貧しい稼ぎ人で、屋号を小針屋といった。五郎治は口減らしのため、少年時代から蝦夷の松前に働きに出された。30歳を越えた頃から千島の択捉まで足をのばし、番人小頭として働くようになったのは35歳の時、突然の異変に遇ってロシアの俘虜になったのが40歳の時である。

千島の択捉の代表的な漁場、老門（おいと）には、幕府の御用船（高田屋嘉兵衛の持船）1260石の「歓厚丸」が錨をおろしていた。幕府の会所、紗那からは役人児玉嘉内、内保からは番人小頭として五郎治が応援にきていた。

その時、内保から飛脚がきて役人の嘉内に書状を渡した。「異国船だ。オロシア船二隻が内保に現われた」との知らせに、皆驚いた。

千島列島は日本とロシアの接点にある。南進を願っているロシアの意図は、前から心配されてきたところだった。明和五年には、ロシアは択捉島を占領したこともあった。両国の空気は悪化、度々小ぜり合いが続いていた。

嘉内は役人として内保に赴き、ロ

シア船に退去を命じなければならない。嘉内の胸に、五郎治の顔が浮んできた。番人小頭の五郎治はアイヌ語によく通じているばかりか、ロシア語も若干はわかる。そして意志の強い五郎治を、嘉内は利用することを考えついたのである。

児玉嘉内はすぐさま「五郎治、すぐ内保へ急げ。お前はロシア語が出来る。紗那に回るようロシア船に伝えよ。拙者は歓厚丸で紗那へ先行して待っている」

嘉内の逃腰に五郎治は腹が立ったが、反面、よしやってみよう、うまく行けば自分にも道が開けるかも知れない。

内保番屋の稼ぎ人は、みな気心の知れた南部衆ばかりであった。佐兵衛は烏沢、三助は柗山、六蔵は関根だった。ただ一人長内だけは庄内だったが、五人は兄弟のようにしてきた仲間であった。

五郎治を乗せた小舟は、内保に向かって進んだ。彼はロシア船との交渉をどう裁くか、考え続けていた。自分にも好機がやってきた。上手くやれば番小屋の責任者程度にはなれるだろう。腹を決めてこの役をやり遂げようと五郎治は心に決めていた。

内保に着くと、佐兵衛、三助、六蔵たちは安心したように「いまのところ赤人（ロシア人）の動きがない。山へ逃げて様子を見てみたらどうか」と、佐兵衛が心配そうに五郎治に言った。「いや、俺は残る。きつとロシア船を紗那の会所に連れて

行く。役人の代りだもの」五郎治は責任を感じて応えた。

佐兵衛たち三人が番屋を出て行くと、間もなく赤人たちが番屋へやってきて五郎治を取り囲んだ。早口に何やらペラペラ話していたかと思うと、忽ち五郎治に縄をかけた。五郎治は観念した。仲間を早く逃してよかったと思った。

しかし、ほどなく五郎治の目の前に、佐兵衛、三助、六蔵、長内の四人が縛り上げられて連れてこられたのである。五郎治たちはロシア船ユノ号に連れて行かれ、そこで縄を解かれたが、そこで驚いたことは船には自分達のほかに日本人の人夫がいたことだった。

「オラたちァ、去年の秋、樺太でつかまった」、彼等は大泊の番人で源七、福松、富五郎、西蔵の四人だった。

五郎治たちを乗せたユノ号は内保を襲い、紗那を襲撃し、乱暴を働いたあと宗谷の対岸、納沙布岬をかわし、礼文島を回って利尻島に停泊した。ここで五郎治と佐兵衛の二人以外は釈放されて、船はさらにオホーツクへ航海を続ける。毎日、海ばかり見ている退屈な中で、五郎治は次のような記録を残している。パンの製法である。『麦の粉に塩少々入れ、水を加えて一夜置き、翌朝またこね回し、餅を作り蒸焼きにして貯え置く。食事のたび、小刀で切って食うなり。このゆえ、朝夕、飯をたく世話なし（麦の餅焼きの伝）』

ロシアのオホーツクに上陸したのが、文化4年（1807）6月。五郎治が第一回の脱走をこころみたのが6年5月だったから、二年間をここで暮らしたことになる。ここでの記録では、

1. 五月まで海が凍り、六月帆船がくる
2. 冬六ヶ月は夜、夏六ヶ月はみな昼なり
3. 「洋服」男女とも狐、テンハリス、鹿、羊にて作れる服を着すなり
4. 「便所」丸い穴のところに腰をかけ、穴に尻を押し込むなり誠に困るなり

「こんなところで死にたくない。おれは来年厄年の42歳、逃げるなら今だ」、文化6年5月11日未明、五郎治と佐兵衛の二人は交易会所から脱走する。成功したかに見えた。蔵から盗んできた食糧を食い尽くし、空腹の二人はツングースに助けられた。その間、筏を造っては川を渡り、小屋掛けして住むなど二人は生きる努力を続けたが、遂にオホーツクに連れ戻され逃走は失敗した。

文化7年5月、二人は再び脱走。やがてギリヤーク人に助けられ。ここで。樫（かんじき）を借りて雪道を西に向うのである。（この頃から“中川姓”を名乗っている）

五郎治の書いた「異境雑話」には、この樫（かんじき）について、『履きも習わぬ五尺余りの板に製したる樫を履き—これはスキーのことで、さらに雪杖の絵があつて一杖には下に丸い輪がついている。これにより雪に入らず』と表現している。

こうして二人の逃走は続くが、佐兵衛はツングースからもらった鯨の肉にあたり、七転八倒の末、11月22

日の朝方亡くなった。五郎治は越冬小屋に一人残されることになる。

ここで、五郎治はコザック兵に捕まった。文化8年5月のことである。この時は結局、一年余の脱走生活で終った。

満州へ行きたい一心の五郎治だったが、また捕われてヤクーツクでの生活が始まった。

そして彼等とともに、イルクーツクに着くのである。

ヤクーツクからイルクーツクへ行く途中で、ある商人の家に宿泊した。たくさんの書物があり、ここで五郎治は植痘瘡（うえほうそう）を図解した「オスペンネエケニガ」という本を見る。五郎治は商人に懇願して、これを貰い受けた。

五郎治はオホーツクで入院したことがあり、その病院で種痘の技術を習ったのであろう、『ヤクーツク、オホーツクにて医者より、植痘瘡の次第を習い得たり』と記してある。

少年の頃、川内町で天然痘に悩まされ、死んで行った人々の不幸な思い出が彼を研究熱心に駆り立てたものであろう。『水鉄砲（注射器）外科の療法』として、注射器を尻に挿し込まれ、石けん水を送りこまれて、『これ熱毒を洗い去る効果いちじるしいもの』とも記している。

文化9年（1812）8月12日、小針屋五郎治は夢に見続けてきた日本の国後島に帰ることが出来た。五郎治45歳、捕われてから5年4ヵ月が流れていた。9月5日、松前へ向った。会所で所持品の一切を没収されたが、その品々の中に革、股引、襦袢、野菜の種などの外に、種痘の書物二冊、石けん灌腸の注射器などがあった。

五郎治は松前からさらに江戸に呼

び出され、ロシアの事情をくわしく尋問された。最終的には川内泉龍寺の寺請証文によって佐助の伴・五郎治であるとの旨をもって、ようやく自由の身となった。

五郎治が持参した種痘書は文政3年（1820）、馬場佐十郎により「遁花秘訣」として著わされている。

五郎治が松前福山で藩の小使いとして暮らしていた頃、天然痘が流行し、松前藩主の息子もこれに感染して死亡した。ある日、五郎治は松前の大商人・大津屋の主人田中正右衛門の呼び出しを受けた。

そして「実はロシア通詞の村上貞助殿からあなたがロシアから持ち帰った天然痘予防のことや、種痘術を習得されたことを伺いました。ぜひ私の娘にその医法を施して下さい」と、懇願された。一時は断った五郎治だったが、その進取の気象に動かされて田中正右衛門の娘イク（11歳）に、種痘を施したのである。五郎治は57歳になっていた。

これが評判になって、箱館方面からも頼みにくるありさまで、人々は五郎治を“植痘瘡植屋”と呼んだ。五郎治の種痘は長崎で種痘に成功するよりも、実に25年も前に行われていたのである。

五郎治の事跡は、後に日本初の種痘施術者として北海道庁から拓植功労賞を受け、従五位が贈られている。彼はさらにはスキーにおいても先駆者だったのであり、石けん水による解熱注射やパンの製法など、多岐にわたる先達であつたのである。

（楠美鉄二「あっぱれ五郎治」吉村昭「北天の星」を資料とした）

森勇男著「下北伝説の旅」より抜粋しました。



「下北かるた」より

ロシアから
五郎治種痘
持ち帰る

【編集後記】山口県上関町の使用済み核燃料中間貯蔵施設構想が2日からマスコミ報道が続いている。当地に続く2番目の施設である。しかし、その発想は地域住民を愚弄するもの以外の何物でもない。早速、広島などから私のところへ問い合わせなどがありました。内容は主には原子力マネーの実情だ。むつ市は誘致当初から調査、建設、貯蔵のトータル期間60年で約1290億円を見込んでいると表明していた。果たしてこの数値の詳細は不明だが、本県の場合は各種の原子力施設分も含まれていると考えれば、現在全く原子力施設のない山口県でどのような金額なのか。町が調査に同意すれば、国から県と町に毎年計1億4000万円が交付される見通しとのことだ。原子力マネーに手を染めて地方自治体のプロパーの英知が潰されていくような気がしてならない。（栗）